



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	児童期における想起のコントロールの発達：“だいたい”と“正確”の教示を用いて〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	佐々木, 真吾
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11633号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58820
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Shingo_Sasaki_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：佐々木真吾

審査委員	主査	教授	仲	真紀子
	副査	教授	安達	真由美
	副査	准教授	大沼	進

学位論文題名

児童期における想起のコントロールの発達：“だいたい”と“正確”の教示を用いて

目撃証言研究に代表される記憶の想起に関わる研究では、事件からの経過時間、喚起される情動、聴取時の質問の種類などのいわば“外的要因”が、想起される記憶の質や量に及ぼす影響が検討されてきた。その知見は、子どもへの事情聴取法（司法面接）の研究・開発にも活かされている。しかし、近年、想起は外的要因によってのみ規定されるものではないこと、むしろ想起者による想起方法の意識化（メタ認知）や動機付けといった主体的な要因が、想起の質や量に影響をもたらすことも指摘されるようになった。しかし、想起者による想起内容のコントロールについての研究は十分ではない。特に、子どもから供述を得る際にはコントロール能力の発達が重要だが、その発達過程に関する知見は限られている。そこで、本研究では児童を対象とし、想起のコントロール能力が他の認知機能と関わりながらどのように発達するのかを検討した。

以下、当該研究領域における本論文の研究成果について本審査委員会の評価を述べ、その上で審査結果を述べる。

1) 当該研究領域における本論文の研究成果

本研究の成果として、以下の4点を挙げることができる。

第一は、想起のコントロールの内的過程を明らかにしたことである。従来の目撃証言研究では、想起者は外的要因により影響を受ける、いわば受動的な存在だとされていた。本研究は、想起者が文脈に応じて教示を理解・解釈し、報告内容をコントロールする主体的な存在であることを示した。

第二は、想起のコントロールに関わる要因として、“文脈”と、文脈を意識化する“メタ認知活動”があることを明らかにしたことである。“だいたい”“正確”という教示は同じでも、課題の性質や教示を行なう順序により、想起のコントロールの在り方は変化する。想起者は様々な要因に応じて、想起の過程をダイナミックにコントロールしていることが示された。

第三に、想起のコントロールの発達過程を明らかにすることが挙げられる。児童期の想起のコントロールは、回答構築や検索が重要な時期から、報告時のメタ認知活動が重要な時期へ、そして、メタ認知活動の影響力が小さくなり、認知機能一般を支える実行機能が重要となる時期へ変化することが示された。このことは、メタ認知の発達に関する先行研究の知見を補充し、拡張するものである。

第四は、司法面接に関し、応用的な示唆を示したことである。特に、グラウンドルールへの知見、“だいたい”“正確”の教示の使い方についての示唆を提供した。

2) 学位授与に関する委員会の所見

本研究は、目撃証言の聴取等に関わる現実の問題を踏まえつつ、現場と実験室のギャップにチャレンジした意義ある研究である。“だいたい”“正確”という教示の在り方や課題の特性によって想起者が回答の仕方を変化させることを示し、主体的な想起者像を明示した。また、想起のコントロールの発達過程を明らかにし、メタ認知を中心とする認知発達研究に貢献するとともに、現実社会で用いられる司法面接にも重要な知見をもたらした。今後、現場において期待される“正確”さとは何かを追求し、また、コントロール過程によってもたらされる想起内容の変化と、記憶の過程で生じる変容との違いについても検討していくことで、より一層の発展が期待される、優れた研究である。

以上のことを踏まえ、本審査委員会では全員が一致して、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。